新制作

SHINSEISAKU

国立新美術館

2015.9.16 - 9.28

Vol.70 / 2015

冬号

新制作協会　広報誌

審査陳列報告

絵画部

樺山 祐和

79回展は、80回記念展へ向けて、新制作協会絵画部の熱気と魅力をより強く押し出し開催することが、絵画部副委員長、代表委員会において確認され、審査陳列においては、従来にない新鮮さを、いかに盛り込んで行くかが検討された。その結果、審査においては「熱い審査」という考えを掲げ、時に議論を交えることも良しとし、より丁寧に一点一点を会員個々の責任において審査すること。そして、若く新しい感覚で作られた今までの新制作にはない斬新な傾向の作品も積極的に受け入れて行く事が了解された。また、従来、2点入選は10名前後であったが、20名程の2点入選者を選出し、新制作展出品者のもつポテンシャルを大々的に発信していく事が絵画部会において了承された。

79回展の搬入者数は393名、搬入点数は937点であった。昨年より14名の増加である。厳正公正な審査の結果、283名を入選とし、内41名が初入選である。入選者から3名の新会員、11名の新作家賞、8名の絵画部賞、1名の損保ジャパン日本興亜美術財団賞を選出した。2点入選者は当初の予定を大きく上回り37名となったが、絵画部出品者の力を強く押し出して行こうとする結果である。2点入選を果たし惜しくも賞に届かなかった方々は賞候補と考えて良く、今回1点入選の方々ともに、是非とも次回、力作を出品していただきたい。

陳列に関しては、新制作協会絵画部の伝統と言ってもよい一段掛けを踏襲し、出品作に上下の別をつくらず、全ての作品の良さが引き出される陳列を目指した。全体構成は会員、一般部門、小作品部門、データ審査部門、各々の特徴を発信しつつ、一つの展覧会として自然な流れと変化を作ることを重視し、また、2点入選者の迫力ある展示を各フロア2カ所に設け、今までにない力動感を作る事を目指した。今回の展示が80回記念展への橋渡しになればと願っている。

最後に、新制作協会会則の付記、展覧会大綱には「我々は同展覧会に於ける一切の作品に対し、同様の芸術的敬意と平等の権利を主張する。」と記されている。創立会員達が発したこの言葉の中にこそ審査陳列に関する根本的な姿勢が示されていると思う。さあ、次は80回記念展である。

彫刻部

大西 康彦

9月4日、会員60余名の出席の下、第79回展に応募された作品の審査を実施しました。搬入者79名、作品109点その内4点が審査を必要としないシード作品です。審査の結果、入選者58名（初入選8名）入選作品61点、選外作品は48点となりました。

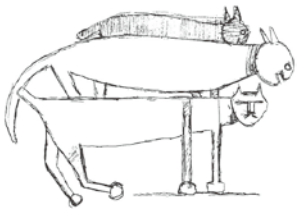
審査は通常多数決で行われます。具象、抽象の区別だけでは収まらない多様で複雑な制作手法や素材の違いのみならず、それを審査する会員の価値基準や創作姿勢もまた様々です。会員の過半数の支持を得て入選するということはある意味、受賞すること以上に難しいことなのです。

私達、新制作協会が作品を公募し、総ての会員の責任に於いて審査をし、受賞作品を定め、新しい会員を迎え入れる。この一連の行為は規約に言うところの「常に新しき時代の芸術家の結合を与望し…最も厳格なる芸術的態度に於いて開催し、以て我々の芸術行動の確立を期す。」を具現化する行為そのものだと思うのです。記録をたどれば、発足から10年間は1桁の会員が審査をしています。おそ

スペースデザイン部　片岡 葉子

らく全員で話し合い１点１点の作品を矯めつ眇めつしていたことでしょう。彫刻部の量的発展に伴い多数決の導入はある意味で必然でしょうが、このシステマチックな合理性だけが総てなのかと悩みました。

彫刻部に限れば毎年のように減り続ける応募者の数と高齢化。マスコミによる団体展無視や一般社会の視線の変化、拍車がかかる若者の公募展離れの現状に、一瞬足が竦みます。審査を終えた私は、77回展会報（VOL.65）で語られていた「新制作は存在意義においても運動体という大義名分は、もはや通用しないことを自覚」するのではなく、今こそ新制作は愚直に創立当時の若き先達の掲げた規約の精神に立ち返らなければと思ったのでした。



スペースデザイン部の審査は床置き、壁面、宙吊り、野外、暗室、ミニ作品についてあらかじめ会場模型を使いおおよその入選点数を決めて行われます。今年は一般作品44点、ミニ49点、計93点の応募がありました。昨年は97点で大幅な減少はないものの、内容的には昨年の一般作品53点、ミニ作品44点にくらべミニ作品が増え、一般作品も小型化傾向にあり、床置き作品の減少がありました。それらの状況からミニ作品の入選点数が増え、一般作品30点、ミニ作品25点の計55点の入選となりました。

展示は当初はほとんど壁を使わない予定でしたが作品配分が多少変わったため、暗室を広げ壁を増やし、ミニ作品展示も2か所設けました。展示は作品を会員、出品者力を合わせて地下から1階にあげることからはじまります。初めに壁作品、宙吊り作品、並行して暗室、野外、休憩室、そののち床作品、ミニ作品を展示していきますが、各コーナーにリーダーを決め、その指示でこれまた会員、出品者が協力して一緒に会場を作っていきます。入り口付近には体験型の作品群もあります。

一般作品の小型化、床作品の減少で会場の充実感不足が案じられましたが、会員の作品に力作も多く、見応えのある良い展示になったと思います。当然のことですが、やはり会員の作品の充実で魅力的な会場となり、自分もこの場に参加したいと思ってもらうことこそが、良い公募作品を集めることにつながると思います。

今回ミニ作品が増え厳選となり良い作品も多かったので、ミニ作品に賞が与えられました。ミニ作品は取りかかりやすい、まとめやすい、リスクが少ないなどということもあり今後も増加が予想されますが、一概には言えないものの、やはり一般作品の発想、試行錯誤、制作に要するエネルギーを思うと同列に審査するむずかしさがあり、今後考えていかねばならない課題かと思います。

『賞 牌』

第７９回展新作家賞受賞者に贈られました。

「ヴェニス　旭日」　佐藤 泰生

4版リトグラフ　27×22 ㎝

79回展企画・展示風景

■ 絵画部

初日のオープントークには全国から大勢の出品者が集まり、力溢れる多彩な作品に囲まれて会話が弾みました。

1年ぶりの旧交を温めたり新しい出会いを楽しんだり会員に批評を求めたりと会場には様々な人の輪が出来ました。

20日のギャラリートークは2階と3階に分かれてまず会員が自作について語りました。参加者からの鋭い質問もあって制作の意図や技法にとどまらず反省の弁など、普段聞けない内容となりました。次に会場を回って入選者の方から作品の話を聞きながらトークを続けました。どうしても会員からの批評やアドバイスが中心になりがちですが、何かしら制作のヒントを共有出来たならば意義深かったと思います。（松木 義三）

■ 彫刻部

9月20日2時より彫刻展示室で79回展のギャラリートークがおこなわれました。3人の会員インタビュアーが、それぞれに気になる作家を8人選び、自分の選んだ作家にインタビューをしながら新人作家の本音をひきだしていきました。新人作家は30歳代から70歳代迄幅広く、しかも初出品、初入選の方も含まれ、材質も、金属 / テラコッタ / 木彫 / 塑像、と多岐にわたり新制作の特徴が良く出た人選でした。

作家の皆さんは自分の作品に十分な自信をもっておられ、素材はなにで、どういう創り方をしたのか。創作の動機についても。またどういった想いで創ったのかについて語り、『かぜがふきわたるように』『この素材のなかに、この形が見えた』『愛する物への切ない感情』など話され、集まった皆さんの共感を誘っていました。もう少し多くの参加された皆さんからの質問や、感想が聞けるとよかったのですが、今後につなげたいと思います。このイベントを通じて新人の皆さんはきっと励まされたと思います。そして来年は今年より良い作品を持って参加しようと思ったに違いありません。もっと多くの作家がとりあげられるといいのですが。また遠くから出品されている作家にも参加していただけるといいのですが。今回特筆すべきはインタビューをしながら、参加された皆さんに対して、彫刻の本質に関わるような事をわかりやすく話して、理解を深めていただいたり、自分の感動を率直に参加者に伝えて共感してもらった会員インタビュアーがいました。素晴らしいと感じました。今後もあらゆる機会を捉えて見に来てくださる方に彫刻に対する理解と親しみを持っていただけるよう努力したいものだと思いました。

（瀬辺 佳子）

■ スペースデザイン部

SD部のレクチャーも、今回の79回展で6回目となりました。9月19日国立新美術館3階研修室において「素材と空間」をテーマに伊藤哲郎氏と藤原郁三氏を迎えて、それぞれの素材の活用、創作のプロセスなど、画像を交えて空間づくりについてもお二人の作品に対する思いが伝わり、満席となった会場も和やかな雰囲気の中、好評の内に終了いたしました。引き続き展覧会会場で行われたフリートークは、直接触れることの出来る作品ブースや暗室、野外展示、休憩室などで、出品者や来場者の多くが自由に作品の魅力を語り合える時間を持つことが出来ました。今後もスペースデザイン部の特徴を生かした展示、企画をしていきたいと思っております。

（吉田 淳子）

【 応募規定変更のお知らせ 】

◆ 絵画部 作者の表現意図に真に適合した大きさで出品しやすくするとともに、創立時の「大きさ、枚数無制限」の原点回帰を目指します。一般審査、小作品審査は廃止になり、出品は次の3つの名称のカテゴリーごとへの応募になります。各カテゴリー 1 点目の応募料は 10,000 円です。2 点目以降の応募については各カテゴリーごとに料金を定めます。尚、応募点数に制限はありません。

【名称】	【規定】	【2 点目以降の料金】
カテゴリー Ⅰ	130.3 cm ×130.3 cm ×30 cm以内（S60 号以内）	3,000 円
カテゴリー Ⅱ	194.0 cm ×194.0 cm ×30 cm以内（～ S130 号以内）	5,000 円
カテゴリー Ⅲ	300 cm ×300 cm ×30 cm以内（～ S300 号以内）	7,000 円

※ カテゴリーⅢについてはエレベーターの大きさの関係で額縁を含めて上記サイズに収めてください。

※ 出品例：二つのカテゴリーにまたがる場合には大きなサイズのカテゴリーへの出品とします。

例 ① 100 号 1 点＋50 号 3 点・・・カテゴリーⅡへ 4 点出品＝25,000 円

例 ② 150 号 1 点＋130 号 2 点・・・カテゴリーⅢへ 3 点出品 =24,000 円

［データ画像審査］応募規定サイズは 50 号～ S300 号以内（ 300 cm ×300 cm以内 ）とします。
応募資格（30 歳以下の方）に変更はありません。応募料に関しても従来通り無料です。

◆ 彫刻部 80 回展よりデータ審査は廃止になりました。一般審査については従来通りです。

「紙コップのインスタレーション」の試み

絵画部会員　屋嘉部 正人

第79回新制作展において、2015年9月22日（火・祝）に、絵画・彫刻・SDの3部合同企画として、「子ども・アート・しんせいさく」作品鑑賞ツアー＆イベントを実施しました。

プログラムは全部で4つ。1つ目「作品鑑賞ツアー」は、参加者へワークシートを配布し、会員の作品の一部が印刷された缶バッヂをヒントに本物の作品を探し出すクイズ［缶バッヂの作品を探せ］と、2つ目は一番のお気に入りの作品を見つけて作者にお便りを書く［これが一番大好き！］、3つ目は参加者自身もアーチストになった気分で絵を描いて投稿していただきました。ワークシートは最後に回収し、会員や出品者からのお返事とともに新制作協会のホームページにて紹介されます。

4つ目は、ワークショップメインイベントとして約100名の参加者と会員が2万個の紙コップを使って展覧会場の空間で「紙コップのインスタレーション」を行いました。いつもの穏やかな展覧会場が、参加者の興奮と歓声の中で、見る間に一変して2万個の紙コップが織りなす感動的な空間ができあがりました。鑑賞するだけではなく、参加する美術を楽しみました。4月のフィリピンダバオを皮切りに、東京都稲城市立若葉台小学校、青山学院女子短期大学、多摩美術大学、埼玉県草加市かおり幼稚園、東京都世田谷区「キッズポケット」、タイ・コンケーン市の小学校、トキワ松学園小学校と巡回し、紙コップのインスタレーションを行いました。　各開催地で参加した人たちが1人1個の紙コップに自分の分身として絵を描きました。その分身は私と一緒に次の開催地へと旅をし、新しい友達と出会います。「子ども・アート・しんせいさく」では、各地での参加者が描いた紙コップの分身たち約3000個が新制作展展示会場で出会いました。合計2万個の紙コップを使い100名の参加者とインスタレーションを行いました。

「いつも見慣れた、ちょっとマンネリ化したいわゆる公募展スタイルって、なんだか古いよね！」と、若い世代からそっぽを向かれて久しい。今年で79才を迎えた新制作展はこのまま老化し文化の片隅へと存在意義を失うのだろうか？近年の新制作は、新制作らしいスタイルを守ることを重視し、本来守るべき「前進と向上」という創立の精神についてはどうなんだろう？変化を嫌う保守的な公募展になってやしないか？私の心の中ではそんな疑問と不安が募っていたところでした。そんな時に『子ども・アート・しんせいさく』の提案が実現したのは大きな驚きでした。これは小さい一歩だけれど、少しずつ古いスタイルを壊していく新しい一歩になれば嬉しいです。この試みが実現し、大盛況のうち無事に終了できたのは、会員の皆様の理解と協力があってのことです。この機会をいただけたことに心から感謝申し上げますとともに、一会員として新制作の「新」の部分に役立てたとしたら何より幸いです。

「紙コップのインスタレーション」というワークショップを通してたくさんの出会いがありました。ご参加くださった皆様、ご協力ご支援くださいました皆様、励ましの声をくださった皆様、誠にありがとうございました。

新制作

新制作生みの親・育ての親〈最終回〉

絵画部会員　荒井 茂雄

みなさんこんにちは。この“新制作生みの親・育ての親”は当時の会報編集委員SD部 中野威さん、絵画部 山口都さん、彫刻部 藤森民雄さんの3名がアトリエに来られて「最近、会員が多くなってきたのでみんなで初心にかえるという意味ででも、新制作が誕生した頃の創立会員の情熱、友情など、その辺のことを再認識することが大切ではないか」と云う事で私に新制作会報に連載の依頼があり、私で良ければと云うことでお引き受けして新制作会報56号からスタートしました。当時の予定より大幅に延びてしまい今日に至りました。

私事ですが昭和18年戦時中横須賀海軍砲術学校の画室で予科練生の教材を制作していた頃、新制作会員故 行木正義さんが画室に入所されました。間もなく終戦。私が帰郷していた長野へ行木さんから「上京して一緒に仕事をしよう」という、たった13文字のハガキが届き迷わず上京して尋ね当てた所が、故 猪熊弦一郎先生のアトリエでした。行木さんは猪熊先生が疎開して空いているアトリエで留守居をしておりました。猪熊先生ご夫妻が帰宅され「荒井君居て呉れないか」と云う事で猪熊先生ご夫妻とご縁になりました。

その頃新制作の絵画部、日本画部、彫刻部、建築部（現在のSD部）の創立会員の皆さんと直接間接的に接する機会が多かったのでそれなりに“新制作生みの親・育ての親”というタイトルでまとめる事が出来たと思います。

田園調布純粋美術研究所の前身である行木さん創立のデッサン会を猪熊先生のアトリエでよく開きました。創立会員故中西利雄先生は戦時中アトリエが焼失して仕事場がなく、よくデッサン会に来られモデルが休みの時等私がモデルになったこともあり掲載の絵はその時に中西先生が描かれた絵です。愉快で楽しく明るい中西先生は何もない戦後の今をダイス、ダンス、デッサンの3Dでのり切ろうといってダイスの時等優勝者にトラックにトイレットペーパーを山に積んだ絵を紙に描いて「これが賞品だよ」と云って楽しみを作ってくれました。

日本画部の創立会員ではありませんが故 朝倉攝さんが「今を創ることがすべてである」と云って個性的な作品をつくっていた日本画部の創画会を退会して舞台装置の世界に入り厳しく励み日本の舞台装置の第一人者になりました。その人生観に徹し、信念に生き切った姿が美しく強く印象に残っています。

私は新制作12回展初出品、その頃故金山康喜さんと共に新制作に出品搬入していましたが金山さんは入選落選にはとんと無頓着で「この絵は薬石効なく落選」と如何にも楽しそうに云いながら作品にニスを塗っていた、ただただ今を楽しむ姿がそこにあった。

この徹底した三者三様の“今”の生き方は何かを教えています。

猪熊先生は作家にはライバルが多い方が良いといつも云われていました。フランスはサロン的でライバルは出来にくいが、ニューヨークは強いライバルが作れるからすばらしいと…。日本には“公募展”と云う作品発表の場が多くありそこで作家は自分創りをしています。公募展はライバルそのものです。

創立会員がつくった“新制作魂”、常に新たな空間が新制作にあり、現代アートを目指す作家の気になる、“Simple”、“Sharp”、“Fresh”な新制作であることを願って。

今回の広報誌が70号になりますのでこれを区切りにと思い広報部の皆さんにお世話になったこの“新制作生みの親・育ての親”のページを閉じたいと思います。長い間ありがとうございました。

挿絵 / 中西 利雄

訃報

（平成27年10月末現在）　新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

加藤 昭男 氏
彫刻部会員

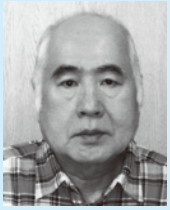
平成 27 年 4 月 30 日逝去
(享年 87 才)

石川 浩 氏
彫刻部会員

平成 27 年 6 月 7 日逝去
(享年 73 才)

須藤 博志 氏
彫刻部会員

平成 27年 7 月 28 日逝去
(享年 67 才)



新会員紹介

絵画部

海野（うんの） 厚敬（あつたか）

この度は会員推挙をいただきまして誠にありがとうございました。2001年の第65回展に初入選をさせていただいて以来、諸先生諸先輩方に多くの助言と励ましをいただきました。15年間の制作、発表を続ける中で徐々に自分が描きたい世界、かたち、質感、そして絵画というものに対する考え方が整ってきた気がしています。今後どんな画面が現れるのか自分自身で今から楽しみであり、もうこの時点で次の描きたい画面が浮かんでおります。
今後ともよろしくお願い致します。

◆ 1977年長野県生まれ。
2001年京都芸術短期大学洋画コース研究生修了。2001年第65回新制作展初入選。第76回、第77回、第78回新制作展新作家賞受賞。

金井（かない） 健一（けんいち）

この度は会員に推挙いただき誠に有難うございました。作家活動は長く細々と続けてきましたが、自分が求めている作品がなかなか整理できませんでした。先輩と広島で新制作展を見てすごく衝撃があり、最後の活動の場として出品を決めました。その後、試行錯誤の大作の作品に、何度もあきらめかけた時もありましたが、それもすごく大事な勉強の時間でした。今は、会員としての責任の重さに取り組む気持ちでおります。作品はまだ未熟だと思います。今後ともご指導をどうぞよろしくお願い致します。

◆ 1949年山口県生まれ。
2008年第72回新制作展初入選。
第76回、第77回、第78回新制作展新作家賞受賞。

関水（せきみず） 英司（えいじ）

私は、人体をコンセプトとし、目に見えないものに向かい会う現代の人間像を抽象化し表現しています。
新制作の歴史を築き上げてこられました諸先輩、先生方に少しでも近づけますよう、さらに表現のエッジに向かい、突き詰め進んでいく決意です。
どうぞよろしくお願いいたします。

◆ 1952年神奈川県生まれ。
1980年和光大学人文学部芸術学科卒業。
1990年第54回新制作展初入選。
第70回新制作展新作家賞受賞。

彫刻部

高家（こうけ） 理（おさむ）

つい会員推挙に応じてしまいましたが、未だに気恥ずかしい気持ちでいっぱいです。
会の一員として迎えていただいたことに報える作品を作れるよう、会員の方々や出品される皆様とともに修練したいと思いますので、これまで同様よろしくお願いします。

◆ 1968年宮城県石巻市生まれ。
1991年岩手大学卒業。1997年第61回新制作展初入選。第74回、第78回新制作展新作家賞受賞。

スペースデザイン部

五十嵐（いがらし） 通代（みちよ）

会員に推挙戴きありがとうございます。50歳からが制作活動の開始でした。
今まで出せなかった自分というものを、創作することで作品に込めてきました。毎年、新制作に出品することで、前に進めたと思います。新制作が育ててくださったと感謝しております。推挙戴いたことに緊張と責任と不安がありますが、これからも自分の表現を素直に出せたらと思っております。

◆ 1952年東京都生まれ。
2006年第70回新制作展初入選。
第77回、第78回新制作展新作家賞受賞。

── 第79回新制作展受賞者 ──

［新作家賞］

■ 絵画部（11名）

小川 あぐり / 奥山 久美子 / 近藤 弘子 / 桜岡 みゆき / 塩田 志津子 / 高野 真木子 / 滝田 一雄 / 田中 直子 / 豊澤 めぐみ / 柳 千代子 / 渡辺 有葵

■ 彫刻部（7名）

大野 良一 / 小口 偉 / 香取 宏幸 / 小柳 順 / 髙野 正晃 / 広瀬 護 / 松枝 源太郎

■ スペースデザイン部（4名）

新出 こずえ子 / 中曽根 清子 / 柳田 眞理子 / 横尾 まさこ

［絵画部賞］（8名）

緒方 和美 / 奥田 善章 / 岸本 洋子 / 杉谷 俊一 / 塚崎 聖子 / 藤田 憲一 / 星 ゆみ / 丸尾 宏一

［損保ジャパン日本興亜美術財団賞］

蛭田 美保子

受賞作家展

■ 絵画部

2016年1月18日 (月) ～ 1月23日 (土)
11:00 - 19:00
[初日] 13 : 00 ～　[最終日] 18 : 00 終了

会場：銀座井上画廊
中央区銀座 3-5-6 井上商会ビル3F（松屋前）
TEL. 03-3562-1911

● オープニングセレモニー：1/18 (月) 17:00–18:00
● オープニングパーティ：　1/18 (月) 18:00–20:00
会場…「えん」銀座店 / TEL. 03-3538-5496

■ 彫刻部

2016年2月8日 (月) ～ 2月19日 (金)
11:00 - 18:30
[最終日] 16 : 00 終了
[休廊日] 2月11日 (祝)、2月14日 (日)

会場：ギャラリーせいほう
中央区銀座8-10-7
TEL. 03-3573-2468

● オープニングパーティ：2/8 (月) 17:00–18:00

■ スペースデザイン部

2016年2月8日 (月) ～ 2月13日 (土)
10:00 - 18:30
[初日] 13 : 00 ～　[最終日] 17 : 00 終了

会場：建築会館ギャラリー
港区芝5-26-20
TEL. 03-3456-2051

● オープニングパーティ：2/8 (月) 17:00–19:00

● 入場者数

第79回新制作展の入場者数は、全日程合計:
47,714人（無料・一般有料入場者合計）でした。

● 巡回展

○ 京都展
10月20日～10月29日（10/26 休館日）
京都市美術館
○ 名古屋展
11月25日～11月29日
愛知芸術文化センター / 8Fギャラリー
○ 広島展
12月8日～12月13日
広島県立美術館 県民ギャラリー

● 新協友

【絵画部】
加藤 恭夫、岸本 洋子、塩田 志津子、竹内 静、
常光 知美、豊澤 めぐみ、葉山 たみ子、渡辺 有葵

【彫刻部】
小口 偉、香取 宏幸、小柳 順、広瀬 護

【SD部】
柳田 眞理子、横尾 まさこ

● 彫刻部シード作家

受賞者の中から翌年無審査で本展に出品できる作家を選びます。今年は、小柳順さん、松枝源太郎さんの2人です。

● 第80回新制作展の開催案内

開催期間：平成28年9月14日(水)～26日(月)
搬入受付：平成28年8月31日(水)、9月1日(木)

● 「公募団体ベストセレクション美術 2016」展の開催案内

会期：平成28年5月4日(水) ～27日(金)
会場：東京都美術館 公募展示室 ロビー階
第1・第2展示室、ギャラリーA・B・C
内容：油彩画、日本画、水彩画、版画、彫刻
(スペースデザイン含む)、工芸

京都展 展示風景

絵画部にカンボジアからの入選者があり、懇親会ではチア・キムター駐日カンボジア王国大使からの祝辞がありました。

《伝言板》

● 図録のバックナンバーについて
絵画部会員・中村修二氏より第44回展図録の寄贈がありました。彫刻部一般出品者の浮田麻木氏より第5回展図録の寄贈がありました。大切に保存させていただきます。
引き続き寄贈可能の号がありましたら、皆様ぜひご協力をお願い致します。

編集後記

荒井茂雄先生を訪ねたのは2007年の冬でした。東急綱島駅よりバスに乗り、メダカの鉢のある玄関を抜けて先生の絵のようなアトリエに入り、原稿を依頼。初稿を会報に載せたのが翌年の冬ですから、あれから早7年が経ちました。まだ玄関のメダカは元気に泳いでいるでしょうか。2011年夏までとの約束より4年も長きに渡り、先生流に言えば、素材を素早くすくいあげ鮮度の落ちないうちに頭の濾過器を通じて整え、投稿頂き有難うございました。
芸術家の意識の在り方の一コマを、会報を通じて届ける事が出来たのではと考えています。
また本展で作品と共にお会いできる日を楽しみにしております。

（中野）

荒井先生のアトリエにて
（2007年冬）

新制作協会

〒160-0022
東京都新宿区新宿 6-28-10 大阪屋ビル202
Tel:03-6233-7008　Fax:03-6233-7009
URL:http://www.shinseisaku.net/
E-mail:webmaster@shinseisaku.net
発　行 / 新制作協会
企画・編集・制作 / 広報委員会広報誌編集委員
千葉 文隆、辻井 久子、田中 直子、
岩間 弘、吉村 維元、中野 威
監　修 / 久保 制一
発行日 / 2015年12月吉日

＊広報委員会では、新制作展に関わるニュース、伝言、ご批判、ご意見をお待ちしております。お気軽にお寄せください。次号をご希望の方は協会事務所迄ご連絡ください。